

1. 古英語韻文作品における *se* の使用についての複数作品間の比較

田尻 小夏（京都大学大学院生）

後に *the* や *that* に発達するとされる古英語期の *se* は、Mitchell(1985)で①independent *se* と②dependent *se* に分けて記述されているように、単独では指示代名詞や関係代名詞として働くほか、名詞句について現代英語の *the/that* のように機能するなど複数の用法を持つ。英語史の中で定冠詞の確立は初期中英語期以降と考えられており、古英語期は、demonstrative *se* の拡張使用の期間といえる (Christophersen 1939; Sommerer 2018)。このような定冠詞的な *se* の使用は特に散文での普及が早く、「archaic in style」の傾向を持つ韻文では、同時期の散文よりその発生頻度は低い (Christophersen 1939; Mitchell 1985; Traugott 1992)。一方、Epstein (2011) は、韻文作品 *Beowulf*で使用されている demonstrative *se* に‘discourse-pragmatic functions’があることを指摘しており、古英語期の *se* は現代英語の *the* や *that* よりも使用の幅が広いことが示されている (Rupp and Tagliamonte 2017)。

そこで本発表では、複数の韻文作品を調査対象とし、*se* の用例を用法ごとに分類し、その指示対象の特定可能性を精査していく。複数の作品間で比較することで、古英語韻文作品で使用されている *se* の照応機能を記述するとともに、照応以外の機能の有無について検討する。

2. 古英語 *seþe* 関係詞の起源と発達

新川 清治（早稲田大学）

古英語における主要な関係詞のタイプには指示代名詞 *se* (*sēo*, *bæt*) や不変化小辞 *þe* をそれぞれ単独で用いる①*se* 関係詞と②*þe* 関係詞、そして、その両方を組み合わせた③*seþe* 関係詞がある。*Se* 関係詞は関係詞化された名詞句の格を示すが、指示代名詞との区別が明瞭でなく、*þe* 関係詞は明らかに関係詞節を導くが、格の情報を与えない。*Seþe* 関係詞は *se* が格を、*þe* が関係詞節であることを示すため、上記 2 タイプの不備を補うが、*se* と *þe* が複合関係詞として機能

しているのか、あるいは *se* を先行詞とした *þe* 関係詞 (*se+þe* 関係詞) であるのかは曖昧である。本発表は研究者間で時に大きな意見の相違が認められる *seþe* 関係詞に焦点を当て、その起源と発達を明らかにすることを目的としている。

3. 古英語・中英語訳の七書および福音書における「*there* compounds」

服部 勇人（大阪大学学部生）

現代英語に見られる *therefore* や *therein* といった語は、*there* と前置詞（前置詞的副詞）からなる、かつて生産的だった表現の数少ない名残である。本発表では、Österman (1993, 1997, 1998)に倣い、これを *there compounds*（以降 TC）と呼ぶ。その典型的な例を以下に示しておく。(1a)は古英語訳聖書 (Ælfric 訳の Heptateuch) から、(1b)はウィクリフ派聖書からの引用である（下線は筆者による）。これらの例からも見てとれるように、TC の意味は概して前置詞 + 代名詞に相当することが知られている。

- (1) a. *Þa heo þone windel undide & þæt cild bæreron geseah wepende*
‘When she opened the basket and saw the child weeping in it’
b. *and sche openyde the leep brouȝt to hir, and seiȝ a litil child wepynge ther ynne.*
‘And she opened the basket brought to her, and saw a little child weeping in it.’
- (Exod. 2:6)

TC に関する先行研究は非常に少なく、管見の限りでは、古英語・中英語の TC についての本格的な調査は Österman による一連の論文に限られる。Österman (1993, 1997)は、主に Helsinki Corpus を用いて TC の通時的発展を調べたものである。その全体的な結論として、TC は古英語期から頻度が急激に上がり、中英語期全体がタイプ・生起数ともにピークとなって、それ以降は現代に至るまで減少の一途を辿ってきたと主張されている。また、TC は前置詞的副詞を土台とした表現であるため、元来は場所的・具体的意味がふつうであったが、時代を経て意味が抽象化していき、文法化しているということも述べられている。

これを踏まえて本研究では、古英語訳聖書 (Ælfric らによって訳された七書、

およびウェストサクソン福音書)と中英語訳聖書(後期ウィクリフ派聖書における対応部分)に生起するTC、そして補助的にラテン語ウルガタの対応箇所を比較することで、次のことを調査する。まず、古英語・中英語訳聖書に出現するTCのタイプ、およびそれぞれの生起数を確認する。次に、文法化が各タイプでどの程度進んでいるのかを明らかにする。これにより、先行研究の結論の妥当性に疑問を投げかける。さらに、先行研究ではほとんど言及のなかったTCの指示対象の分類も行い、TCに関わる制約に迫ることを試みる。

4. *Japanner* か、*Japonian* か、*Japonite* か：民族名派生の接尾辞の発達と競合について

青木 輝（慶應義塾大学大学院生）

日本人の英語名 *Japanese* では、なぜ国名に付加される接尾辞として-ese が選択されているのだろうか。なぜ-*ish* を用いる民族名は、イギリス周辺の人々を指すものが多くなり、-ese を用いる民族名はアジアやアフリカに多いのだろうか。こうした民族名の派生における地名と接尾辞の関係について、須永 (1995) や大高 (2013) では、歴史的背景などの音韻以外の要因が接尾辞の選択に関わる可能性があると指摘してきた。さらに、これらの研究を受けて歴史的観点からの調査を行った Aoki (2022) では、-ese、-ish、-i といった接尾辞の付加には歴史的な動機づけが存在し、接尾辞間の競合という英語史的背景のもとで現在の体系が形成されたことが論じられている。

しかしながら、こうした問題を通時的・歴史的観点から一貫して分析した研究は、現時点では Aoki (2022) に限られており、多くの課題が未解決のままとなっている。例えば Aoki (2022) では、現代英語における国名とそれに対応する民族名が主な分析対象となっており、分析の軸は共時的で限定的なものとなっている。そのため、各接尾辞が歴史的にどのような使用傾向を示し、いかなる発達過程をたどってきたのかについては、十分に検討されていない。また、民族名派生における接尾辞間の競合という観点からは、Bauer (1983) において断片的な言及が見られるのみで、歴史的にどのような競合や混乱が生じていたのかは明らかになっていない。

そこで本発表では、各接尾辞によって派生した民族名を *Oxford English Dictionary* から収集し、民族名派生に用いられる接尾辞の歴史的発達や傾向、およびそれらの競合の様相について分析を行う。具体的には、-ian や -ese などの接尾辞の流入が本格化し、大航海時代以降の新たな民族名派生の必要性が高まった時期である初期近代英語期までを対象とし、各接尾辞の使用傾向とその通時的発達を明らかにする。そのうえで、民族名派生という同一の機能領域において、これらの接尾辞がいかなる関係にあり、どのように競合・共存しながら現代英語に至ったのかを考察する。

5. 著者に聞く： 藤井香子『古英語への扉 [音声 DL付き]』

藤井香子（大阪大学他非常勤講師）
聞き手 西村秀夫（三重大学名誉教授）

2025 年 12 月、大修館書店から 1 冊のやさしい古英語の入門書が刊行されました。題して『古英語への扉 [音声 DL付き]』。本書は、英語学を専攻していくなくても古英語を理解できるように、日本語で分かりやすく解説する入門書・独学書です。古英語には音声がついており、練習問題とその解答も各課に用意されています。古英語の世界へのガイドブックであり、招待状でもあります。

このセッションでは、著者の藤井香子さんにご登壇いただき、本書の企画が成立した経緯、ねらい、執筆に際して留意された点、本書の先にあるものなどについてお話を伺います。